関西スクエア

朝日21関西スクエアは、さまざまなテーマを議論して関西から問題提起をしていくことを目的とした会員組織です。1998年に発足し、朝日新聞大阪本社に事務局があります。各界で活躍している多くのみなさんの参加をいただき、シンポジウムや公開対談の開催にも取り組んでいます。

朝日21関西スクエア賞は関西スクエアの発足10年を記念し、2008年度に設けました。関西を足場に、学術、文化、芸術、経済、芸能、スポーツ、市民運動などの分野で活躍する若い人材が対象です。関西スクエア企画運営委員と朝日新聞社でつくる選考委員会が受賞者を決めています。

歴代の受賞者（敬称略。肩書は当時）

第1回（2008年度）
神谷之康
（脳科学者・国際電気通信基礎技術研究所脳情報研究所室長）
＝脳の活動から心の状態を解読する研究

竹下・ルッジェリ・アンナ
（京都外国語大学講師）
＝西洋人の視点を生かした禅研究や武道の実践

第2回（09年度）
高橋智隆
（ロボ・ガレージ社長、東大特任准教授）
＝人間型ロボットの研究開発

第3回（10年度）
西光慎治
（奈良県明日香村教育委員会主任技師）
＝牽牛子塚古墳の発掘調査

第4回（11年度）
山田真澄
（京都大学防災研究所助教）
＝「緊急地震速報」の研究

選考委員（敬称略）
栗本智代（大阪ガス エネルギー・文化研究所主席研究員）
後藤正治（ノンフィクション作家）
佐伯順子（同志社大学大学院教授）
広瀬茂夫
（日本総合研究所関西経済研究センター所長）
鷲田清一（哲学者、大谷大学教授）
＝以上、関西スクエア企画運営委員
阿部圭介（朝日新聞大阪本社編集局長）
安東　建（同局長補佐）

この特集はデジタル版でもご覧いただけます。

第5回関西スクエア賞

釜ケ崎芸術大学主宰・上田假奈代さん

関西で活躍する新進の研究者や活動家を応援する朝日新聞社の第5回朝日21関西スクエア賞に、詩人で釜ケ崎芸術大学を主宰する上田假奈代さん(43)が選ばれました。日雇い労働者と詩を書いたり、哲学を論じたり。この学びの場でなにが見えてくるのか。上田さんと関西スクエア企画運営委員で哲学者の鷲田清一さんが語り合いました。

うえだ・かなよ
詩人。1969年奈良県生まれ。互いにインタビューをしながら相手についての詩を作るワークショップなどにも取り組んできた。

釜ケ崎芸術大学

上田さんが代表を務めるアートNPO法人「こえとことばとこころの部屋」（ココルーム）の活動として、日雇い労働者のまち、大阪市西成区の釜ケ崎（あいりん地区）で昨年11月から今年2月まで開催。美術家の森村泰昌さんや哲学者、天文学者ら多彩な講師を招き、42コマの授業を開いた。労働者やホームレスら延べ約570人が授業を受けた。

ココルームは2003年、大阪市の新世界を拠点に結成。ホームレスの表現活動支援などを手がけてきた。04年にNPO法人となり、08年に事務所を隣まちの釜ケ崎に移した。

鷲田「吸い込む力」すごい　表現 安心な場でこそ 上田

わしだ・きよかず
哲学者、大谷大学教授。1949年京都市生まれ。2007～11年に大阪大学総長。著書に「『聴く』ことの力」「〈ひと〉の現象学」など。

鷲田　芸術大学の受講者はのべ500人以上だそうですね。どんな人が来られていますか。

上田　8、9割が釜ケ崎のおっちゃんたちです。60代が多いです。みんなおっちゃんたちの学ぶ姿勢に励まされています。

鷲田　宗教学とか天文学とか教科が幅広い。書道の授業もありますが、どんな内容ですか。

上田　先生がまずかな交じりの詩を5点ほど書きます。それがお手本。おっちゃんたちは筆なんて何年ぶりやろうと照れながら、2時間もすると筆づかいが見違えるようになるんです。自作の詩も書いてもらいます。

この授業のきっかけは地域のお祭りで数年前に主催した「習字コーナー」です。ある人は「花のようには咲けないけれど、道ばたの草のように生きていきたい」と書きました。そして、自分のことを話し始めたのです。家族がなく、仕事がなく、釜ケ崎に来たのだとか。

鷲田　自分を開いてくれたんですね。

上田　気持ちを声にするのは大事なことですが、そこまで至らないとき、書くという行為があるのだなあと思うんです。

鷲田　「表現」の授業もありますが、どんな内容ですか。

上田　この授業では、ずっと自己紹介をしていました。お互いの自己紹介にいろいろ言いあうので、気まずくなったこともあったようです。そうしたらその人が次も来て、自分はコミュニケーションを学びにここに来た、と言ったそうなんです。けんかっ早くて傷つけあってきた人なんだと思うんですが、ああこの人は人との接し方を学びたいのやなあって、みんな納得したそうなんです。

鷲田　いい話ですね。哲学でも、議論をすると、むきになる人も多いものです。演説するとか、人を攻撃するとか。だからそういうやわらかい空気が生まれるのはすごいと思います。

上田　この大学を開いてみて、人は安心できる場所があって、やっと心から素直に表現できるんやと気づきました。

＊　＊　＊

鷲田　上田さんは不屈の人というイメージがあります。何が支えになっていますか。

上田　普通なら正義感や使命感ということになるのでしょうが、実はある出来事が今の活動のきっかけにあります。13年前のことですが、ある大学生に「詩を仕事にしたい」と相談されたとき、「難しいんじゃないの」と言葉を濁しちゃったんです。彼は1週間後に飛び降りて亡くなってしまった。悔やんだのは「大変だけどがんばりや」と言わなかったことです。詩人では絶対食べられへんと私自身が思い込んでしまっていた。

私はかろうじて生き残ってきました。だれもが人生がいやになることがあるけど、その人が命に気づくような、ことばや態度をもつことが、詩人の使命じゃないかと思ったんです。

鷲田　なるほど。それでココルームを開いたのですね。そこからなぜホームレスや釜ケ崎と関わるようになったのですか？

上田　ココルームを開いた場所がたまたま、隣まちの新世界だったんです。勉強をしていくと、高度経済成長を支えたのは釜ケ崎の人たちだとわかってきた。便利な社会を享受している私は、このまちの問題を見つめずに先へ生きていったらあかんなと思いました。

鷲田　上田さんは理念とか社会的要請とかじゃなくて、人間関係を自分の皮膚感覚で広げていった。そういう「吸い込む力」がすごい。

上田　釜ケ崎で活動するまでは、たとえばアフリカで飢饉やテロで亡くなった人がいるという新聞記事を読むと、悲しくてただ泣いているだけ、というところが自分にはあった。でも今では、きっとアフリカでもがんばっている人がいる、だから私もここでがんばる、というふうに思えるようになりました。

＊　＊　＊

鷲田　今、学ぶことがいい会社に入るためとか、成功するためとかというように、手段や道具になってしまっていて、貧相だなあと感じます。だけど、釜ケ崎芸術大学のおっちゃんたちからは、何かのために学ぶというより、知りたい、したことがないことをしてみたいという心が見える。すばらしい。

上田　講師の方々も、学ぶ尊さをこんなに知っている人に話すのは喜びと言ってくれます。

鷲田　よほど本来の大学に近いのではないでしょうか。偏差値で決めるのではなく、あそこで学びたいから行く、という場所ですね。

上田　釜ケ崎という場所で大学を続ける事を大切にしていきたいと思っています。

鷲田　それだけのエネルギーをつぎ込めるのがすごい。気前がいいというか。大阪は自由都市と言われてきましたが、自由を意味するリベラルという英単語を辞書で引くと、たいていは「自由な」より先に「気前がいい」「寛大な」という意味が出てきます。上田さんは大阪の本当の自由、リベラルを体現している人ですね。

上田　こういう場で勉強したんやでって胸を張れるおっちゃんもいるだろうから、今回の賞もありがたくいただきました。フェイスブックに「釜ケ崎芸術大学卒」って書いてる人が数人いるらしいんです。若い人にも、もっと来てもらいたいな。

お手本を見ながら習字。講師のアドバイスで見違える筆づかいに＝いずれも大阪市西成区、ココルーム提供

昨年11月19日にあった初講義

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。